重鐫

日本英対語

夏

113
721
2

13
721
2

日本紀附記卷之四

夏 漢書律曆志ニ云ク夏ハ假ナリ假ハ大ナリ萬物假大ナリ
之ヲ言ヒテ物ニ假ル之ヲ假ト云○和名抄ニ夏トヤマツ作セ
しハあつと云ふこなり和語ニ夏ヤマツ
あつしお夏す暑熱乃義とこれり

素問ニいはく夏三月これを蕃秀こゝろ天地氣交ス
萬物華榮ス夜ニ臥シ早ク起キ廣ク於日志ヲ
ていはくるゆるくして使ヒ英華ヲ成シメ
天氣ヲ通シて泄ヲ無ム暑ク出シ暑ク
逆シ長ヲ絶ツヲ勿ル氣ヲ外ニ泄シて養
長氣送ヲ之ヲ逆ニ則チ傷ル
者カシ

千金方にいはく風邪の面をなるにて目のなるを
人として面はあく癖をまた又面風をおこしむ
又曰ク七十二日昔ヨリ嗜代金酒をもぶ紀辛をまして
脚腫と書るへし
内經にいはく夏月冷衣鉄器をもて枕とし涼とする
なるれたに人の目を換と
書紀に稲にいはく夏月蓮の葉あるを菽をと食
これをもて一類へし
金匱要略にいはく夏月鼠乳と食ると是也
紀氏家秘録に苦蕓と食ましいはく

これをもてへし
月令廣義にいはく夏月九月にはいはく一切濁物酒の
及水をのむると是又ある盥盥をもてへし
又いはく夏月腎氣衰絡と是又
氣と傷る毒と換ル
又いはく汗乃衣裳より遠くと日ふ栖
出いるるに痛ると出れ
毒書薬書にいはく盛暑熱を御ル冷水にて洗
ごとに脚と牧栖ス
熱へし又冷水にて是と澄へし

又いとこなれ暑湿なる所にて生ずるとへの手蓼とれい瘧
とも冷なる生ず瘧と生ず
又曰五月に心腹に腎衰に精化して水こなん秋ふかく
加凝花保薔薇を固とし煮て熱地とてくが
脇中湿脇ちり生ず瓜果茄氷水冷湯粥餅密瓜合
へから流れて食をれば多くは秋冷よ応瘧病とうるる
冷水とは沐浴して面を洗ひ肩を洗ひ車をかれ
人をせ高熱眼時くく脇脇頭逆し霍乱水飲茶
乃痢とゆ中むる風よ動るなれ根中を人伝
ちく脇を揮しむる車なる汗孫毛孔開展ちく風邪

入ればこれと称世人人として風痺石仁詰痛蹇澁の疾
を逆しむ年壮にして即言とるとくとく赤病根
を稼るなく氣衰ちる人を接数乃寄よ逆ぢるごし
強中まろしきこれと称へし
強き人のいとく五月間よ供浴冷水とのを瓜桃冷
の酒宜くのく食しのくれちくとれを秋冬瘧病
とまるふまとまるなる
五月暑よ傷るまく身体たれるる痩ちる人伝
これとを痩しいふまる病痢よりく薬と服すへし
又万象集十六巻大体虚弱嘔吐痛人一寄よ

石麻呂爾吾物申夏痩に吉跡云物曾武奈伎
取食 鰻鱸瓜乃羹夏痩に効と俗に申習わす事
見えたり然しげいさまの事なり

四月 立夏は四月乃節 小満は四月の中 ○四月は長月 孟夏 余月
乾月 繰と伸ばしたる ○四月乃雲と卯月と云和のお義
ひしろゆつうれ花月とも
明せりと奥義抄よりえたり

朝日 國信今日より四月に日まて給と差ゆしと日と云
ぞしいよ吉のに出ぬ

八日 法佛日なり灌佛 ○ことに修行の足は法仏と
ゐよ部 栴檀香と云く香水 最金書とも つく赤
色なり 丘澤香と云く仏水 ○ 法水 ○ 仏水と云
て黄色水 ○ 安乎香と云く黄色水 ○ 佛頂
法くこそ云り月建れ 法くるは洗 ○ 小さるぬ
お 朝ふく今日佛よ水と法せ むるの 推古天皇
の御ことなり

十五日 法屠の結夏今日より夏ことまりて 十月十六日よ
いうて 結夏と云 ○ 九十日 安居 外
よあす 木蘭 ○ 梅ん事とわくくる
たりを 釈 苑 那 ○ 月えり

晦日 沐浴

今月梅雨よ先 ○ 屋乃漏やくよ 雨の降

四郎殿のよりとうげよりまいる霜月ちかくの月を
梅雨ふりはじめ月分かくとうくに早しら伝これとさうひ日
と云天満宮ゆもうさ時手まい屋宅と俗称して
功多しこれハ唐土典よ定役こ功として造紙俗称ちと
ちかよ時行ち事とのきこ月ちり月より月ちと物
と云二月二月八月の月を加功云十月より月ち
ちとと紙功ちと作ちまいハ月ハ日ちと時よ
修生ハ功多ちてたちとのちりへしハ月迄
梅雨ちく雨梅ちるあり伝ちこれと加ハ花産と
ふ又和のむなしちとちり

六月天氣よりハ時書畫多と日に晒して五月の節
へく紙よ糊とつけちさちをちり手く梅雨乃後を
とひちをはけちこれハ徴いでハと月合度雨ちこれ
衣服ちと和ハ一ちく梅雨乃温雷ハ乃ちちちと
日よさちせへ蔚並女涼ちく徴生ちす
七月あちこ一ちく筆ちを塩滝ハ乃へしこ法先ちと云
てこちを玉ちとちて二ちこ
入桶よ方ちへよ小米市ハ乃月ち塩と二ちい
ちけ重へし又筆ちと云ちく法とちり熱湯ちく中ひ
腦一紙ちく牧仲用乃時米消よ紙ちく一ちて月四色に

ちゝく解のう塩羊ハ塩湯にくゆゝさうけ湯ゝ
ゝ玉ゝと長家地用ゝ丸てゝう
七月ゝ白ゝゝゝの玉玉。大豆。赤小豆。胡麻。胡荽。蓾。苦也
純陽乃月ゝ玉ハ精氣を保ちゝて益ゝ次と夏
産婦ハ月ゝゝう又七月暴怒ゝゝゝと傷事ゝなる也
これと地せハ秋元瘧とゝ事ゝ又家水ゝく面と洗
ゝ月ゝゝゝ事とゝゝ
八月ゝ味丸と服せハ七月ゝり始くのゝゝ男林集事に
去夏ゝ腎ゝ氣丸ゝゝ絞ゝ又ハ地黄丸と服ゝゝ
冬ハ味丸と服ゝゝゝ月ゝゝ味丸腎ゝ丸

地黄丸ハゝゝ月ゝ地ゝゝ味丸ハ味丸に準ゝ肉桂と
かゝゝゝゝ又藤豆蔻ゝ留薬にか減ハ味丸ハ味丸ゝ
肉桂又味ゝとかゝゝゝ
ゝう薬ゝ久ゝ紙をゝにゝゝゝゝ
七月乃土候ゝ一螻蛄ゝ才二塩蛄出ゝ三玉瓜生ゝ
立夏の二候ゝゝ牙ゝ苦菜秀ゝ又蘆茅花ゝ
六秋ゝ大海の三候ゝゝ
立夏辰ゝ十六刻十分秋巳ゝ三刻ゝ分小満辰又
十八刻二十分秋巳ゝ十一刻ゝ分 月令廣義

五月 節と芒種と云中と夏至と云ふ○五月の異名 仲夏 皐月 鞠月 律と難賓と云○五月の和名 さつきと云ふ 一説に五月を略せりと奥儀抄に見えたり

四日 沐浴 粽と菖蒲とを製し用ひす 粽米とさゝらあくしの葉にて包む 細索にて沸湯にて煮る 又沸湯にくゝり米とりの米粉にてあるべく 又沸湯にて煮さし 九ちゃに 鄉ちゃと八米と麻とにて引しこ八日ちし 紙にくつゝむ事 三くよし 又粽と菖蒲 稲米乃煎汁 甘く煮べし 也 月令廣義に見えたり 唐代は端午に粽を食し 角粽 茨粽 角黍 百黍粽 九子粽 ちまき 粽と角とは

又雄黄 くすり 又菖蒲 くすし 又作の角 くすし 又 まき 祥乃縄 のあやまり 武 五色の糸と 縄 ちまき 今ふく 数珠のごとく つゝみを 作り 我国古へ粽と交乃事 又指遠集十八乃詞書に ちまき 伊勢物語 ちまき 又 ちまき 粽を 出ろと云 武 たんこ 一ゝ ちまき 九 ちまき 粽 ちまき 明日粽と親戚より送べし

○函信 今日艾菖蒲と屋内のうに挾む

粽を作る米粉 乾 艾 菖蒲 艾とゝもをひて人の形のごとく 戸上に

國俗艾菖蒲とのこに掛むとかきこまぜ
弘仁式に五月三日平旦に菖蒲菖蒲根を酒殿の
前よりこの道ハこ[illegible]ゆるすとみしより
又指艾り掛よ五月四日宮殿寮菖蒲
中宮より掖庭納之 白雄乃ゑよ 五月五日

ゆとしとあやめ[illegible]
ゆり出る蓮生乃やと

五月

端午 端午ト云又重午ト云 [illegible] 九齢上大祿曆序ニいハく 漢武帝元十六年八月
端午雄黄 又宋陽の表ニいハく月惟仲秋日在鶉尾 結年ニ[illegible]
乃ち八日ニ[illegible]端午と[illegible]
[illegible]月八日と
端午と解す 國俗今日粽とくしひ菖蒲酒とそし

且今日より麻の衣と[illegible]く八月晦日より[illegible]
粽とくゝ如る後漢紀ニ[illegible]
ゆゝ汨羅ニ投して死と楚人これとあわれ
毎年此日に粽を作り竹筒に米を詰て
投してきれと[illegible]
同といふ[illegible]の海濱と[illegible]
同方美と名[illegible]同ニ[illegible]
車[illegible]
版[illegible]乃ゝ[illegible]
棟樹の葉とゝ[illegible]

粽ハしこれ是二物を蛟龍乃おそるゝものなんとあり今日粽を食ふハ此ゆゑなり月令廣義にも屈原が姉女嬃これを悼くゝりて屈原を弔ひまつりしとみえたり又粽を悪鬼にかたどりて是ハ鬼なり切くこれを食ふハ鬼を降伏する義なりと和の晴明が簠簋の内伝にあり又粽の繪ありにてんや周處の風土記にいふハ菰葉をもつて黏米をつゝみ灰汁にて煮て粽となしこれ浴蘭湯を包裹とし穀女すなりかくてそく飾りあまごんとて一浴生すべきなり

五月一浴生すべての浴湯

包裹ちまきの多く穀せず

又菖蒲湯をのむ事歳時雑記に午日菖蒲をきざみ細末して酒にうかべてこれをのむ先ハ湯氣を助け年をのぶ也とあり一寸九節の菖蒲よしと本草綱目なり詳は菖蒲浸酒竟楞縁

○又くすだまを今日薬玉とて菖蒲よりさまざまの雑色の糸十種かりと五色の糸をかざりそのうへにてひぢにかくるなりおやまき典薬寮あやめのつゞくことあまん又菖蒲玉を御帳にかけ群臣にも給ふ事のゆへしとぞ

延喜式五菖根源にみえたり又檀とを菖玉に作り事紀にもみえたり

傳奈良時平記始

傳奈良時平記卷四
九

拂すんぶ風俗通よりみる日五綵の糸をもつて
腰よりかくれい毒及鬼を逐ひて疫疫をやま
まぢらむ一名を命縷一名いわく色縷一名を
續壽といふと載これ又按ずるに端午に
雜綵をもつて合歡と結ひ腰に纏ふ之りかく
るものなるべし

○又世俗に今日菖蒲湯と用ひ沐浴をなすなり
按ずるに大戴禮に五月五日菖蒲蓂莢を沐浴せしむと
楚辭に沐芳湯と見えたり今俗人の菖
蒲湯と用ひ沐浴をなすもまた風俗なるべし

○又今日婦人女子たるものは菖蒲を頭上に插ム又
勝よりもつぱら如意とれいは病を除くと信ずるゆへなり
案ずるに雜記に端午乃日菖蒲艾を編て人の形に
作り又を蒭靈の形にこれを常に用ひ邪
氣を辟と記せり かくのごとき信ずるや支那にも
いにしへ明帝紀に是天中節旋剪菖蒲葉雜彩
又素問に作艾灸を用ひ玉燕鈔に艾虎を

○今日京師にて義乃祐ふくを競ひ親友七日の祝ひ
潔齋をなして素麺を食す二十疋翌日より是をとて
ろくて一二の者と定めをなすなり裏来を思しるを文に

二つの日蓮宗の勝願寺本堂の傍八面の方に楓樹
あり色より小にて落葉すれども枯れず法人祥集と名付ける
大なる梅の樹あり枝葉のひろがりて八畝歩に及ぶ
樹の接穂なるべい立てるものい塚あり
多くつゆさう枝をしくてこひなるくさせあるを
見るに昔うらに祥集の中へ入れこあばまんべるいる
こふ作枝とつくるの所ありさこいなりかく
なつ出るを宿とこぶがてくに就り求りて
接ぎこれ新しいかちと絶いまこ伝えくせるよりく
見よあり事をうしあるを又人る門中まで引
ひて門よりとち衣裳とぬくしてつくこさひ
潔斎をなしたるとこ次して客人の縁たるよりく
こ記をあるくす蔵をるを元賀茂の村民い社人
なくすあるはあるされこと つ祭よ伝あり内史といこ又
我家此史をを人よりこえたるのこ縁史といし而地
むしいい大国武蔵殿にして五日に競馬弓射の事
行りて五位以上を賞とせるとなるし延喜式よ出るせり
祇園御霊よいくく又月五節天皇あやめ代つくと
うつ行くく武蔵殿下御幸行りて上府宮射八るなり

五日は五位以上の人をまねきて宴を行ふに宴の日は宴
あるべきく競馬の事なり今世義あるべく覇と決
五月の競馬とは右の近衛府走馬の儀式なり
我国にては文暦嘉祥の頃より端午日走馬の儀三度の藤柳と
あるべきなりて今日に至るまで此の儀の行はるる
○今日山城紀伊郡深草の里伏見森の森にて
遣とて競馬あり此神を延長式に二の社に懸寸
の神社なり日本後紀に貞観の別也
とあり又三所は皇子と武内宿禰
良親王伊勢神宮井上内親王也今日深草

森よりひたを出でうの神は光仁天皇の御宇天應元年
丁未國の山城裏木より出でられし天皇御子
淳和天皇親王にて大和軍として遠征あるべきよう宣
旨ありて出でて南北に行幸ひて又月あるの
志賀の神殿にて大風吹きて大海波
とひ寄せしかば吳城一城ともに流れ
ひ寄せしかばかの城の人民
平樂の海とよまれあひけるとやうに出でられ
日蓮海のかなたと方とともなりて
なりけるいはれ事むりしの書き紙に人形と

つき付箋紙板と書き形こうらく蒸籠の蒸はこと
作り武末と鏡もち刀のごとく多づけ者ごとて戸部よ立
作りしの年八風俗異形と云のごとて衣とりて
人ごと形とこと作と又ごとこれて衆多を作ごと
或明書とこと世紙とをしこと世紙関の勢をかこと
先こと戸部よこて作る先とかぶこくふと紙紙て
ごこく乃絵とうたこく書年ごつ者是とも戸部こ
たこく作これとのごとと云武絵と用ることなり衆ハ
ち鏡をかこて是と作ごこと云親自より文なま
て見書此事ごこ

物ごこれをこのごこまこれは他ごこ事作り業商
雑記ごいこく場年ハ形の人天師を畫て奠
又土ごく天師を他ごり艾とごく繁こ藕と
ごく業ごこ門上ごこ又艾を採絞ん人乃
形に他ごこ戸乃上ごこのかこれハ毒ごまとごく
ごり物ごこ後漢乃張陵と
教師ごて天師と云
○今日ごこあ首ごこ事ごく前建業改記ごこ又月
又日四民絵ごこ蹋百草ごこ又百草ごこと闘ごこもこ乃歌
あごこと云ごこ世ごこ云ごこハごこごこごこ
日本紀ごこ事猶と云ごこ章賀ごこ乃帳ごこて百草ごこ闘ごこ香菫
ごこ事ごこ云ごこ

又章茅ひり蒲又今朝園草は宜男とのり歌ふの
園草の乃ちは小芋園今朝緒盈襟百草の香こゝ伯り
百草のけを搗こり藥こゝ青蒿に配さと
丑こゝ百病療疫こゝ服して毒の青菜こゝ功十倍
せり又今朝月未ゝ初百草を採こゝ汁とつき出し
石原こゝ和ちこゝ餅こゝ造れす一切の金疾こゝ浴
しと凡金廣義こゝ凡こゝ百草こゝ取こゝ牛膝澤瀉五葉
草どこゝす〻節佐伯著略
○張華草こゝ五月
五日蓬起百鬼こゝ凡艾こゝ
と端午こゝ紙こゝ

と但艾乃苗みでのこゝ付こゝ浅倉英に
乃こゝ市にこゝ艾こゝ他こゝ
それに用ひりしされこゝ伊勢こゝ今日こゝ
說生食丹金說こゝ
○又今日蒲こゝ事行こゝ
なこゝ家附記こゝ
石屏こゝ詩乃ちこゝ
榴花角黍蕣時新何處赤こゝ石瀨移嬉美江湖
老詩寒也陶高艾上柴門　又　ある人
滿榴花上濕こゝ百日切菖蒲泛瀾醒今日獨醒無用

月令通考こゝ紙連出こゝ月こゝ
波に越こゝ句越こゝ紙こゝ

もゝなり天痛快漢雑論

十三日　此日竹と梅栽へし　尋事に又用十三日と竹碎
日とす又竹遠日もいつこれ日竹とうゆ也いかゝ
敬に泥と云なり

晴　休沿

此月淫雨ゆえこれと梅雨しるべく又微雨こもかゝり
梅雨は本肥土に茅蕾石榴樹もこの枝と多ひ
て花へしし月令廣義に見えたりさは茅生て
つし薔薇水梔子女子菖蒲沿又奥家人功こ
とし紀事に奴僕事と慶しおこたりたい家刷掃

るし梅雨久森の中も家僕をして蕩とは見
屋とはてしむへし舊記書籍遠掃食酒器と晴し
新に載て草本茉莉流よりひ濃屋と草ゆへ
こ功用廣し又梅雨出と大雑に貯重器と鬱
とれいえれて美なりと蕩に見えて下位は
をへて出へりて出又梅雨ゆえく疱瘡を洗へい
ろれおこれし鬱と他りこれと用重ハ鬱し
やもく夜沈ゆえこれと用れい洗けのもこせ
茶碗に食器茅屋下見えたり
梅雨お入り沈絵こうして一決し雑雑に

ひとく間人立夜の後庚子の日と入梅す〜 芒種
種子後壬子の第五日を半梅こゝに祈雨にいとく苦
種乃後丙に第五日を入梅す〜 小暑の後壬
午〜五日を梅雨 金鶏のいとく芒種
乃後壬に第五日を入梅す〜 夏至乃後庚子
五日と半梅す〜 又書時節の後五日芒種乃
後壬子五日を入梅す〜 小暑入後壬子の第五
日を梅雨 立秋の後壬子の第五日を
第五と入梅す〜 立秋の後丙の日を
長梅雨 すん論所のとゝ乃後元梅雨 かへの

秋の雨ゝを和尾ゝを小雨ゝ乃後作りまれゝとゝろの
旧合〜〜 横軒堂 繁雨 旧いとく 洪湯之法 本国
有 完 秋の雨 天地 流 窓 化 学 窓 暑 風 雨 之
時候 心 有 正 速 ゝ 乃 拘 日 数 雨 刈 横 雨 出 入 之 部 雑 事
毒 夏 〜 書 恐 ゝ の 横 作 ゝ 豆 ゝ 旧 夏 作 書 不 ゝ 学 書 諸 ゝ
此 言 平 ゝ 芒 種 〜 後 霖 雨 初 降 之 日 為 入 梅 ゝ 霖 雨 收
都 〜 日 為 梅 雨 ゝ 平 ゝ 芒 ゝ 差 矣 十 月 霖 雨 ゝ 乃 拙 也
世 作 ゝ 本 ゝ 又 生 乃 ゝ ゝ ゝ ゝ 重 墓 間 作 ゝ ゝ 又 月
乃 中 ゝ 乃 十 一 日 に 作 ゝ ゝ ゝ 作 ゝ 日 不 洋 ゝ 作 ゝ 不
犯 淫 欲 不 食 ゝ 幸 湯 肉 日 ゝ

梅と酒より重墓乃物に唐那支人の中信氏亡命たる
四人ふ蔵そなと多し重事とのぐくとつり手甘ふ
中夏五月七十二候乃内夏の末三候なる五月
陰金一て毒疫を生ずる
夏至の日井と泉水を改れい疫をもはらと清氏礼俗
志よりこうり又夏乃後丙丁に当る日支海の交
とをれいたしとあり千金方に云
六月乃祓事梅と瓜と茄子と茗荷と人尖
波い重く流水牧用く鳥獣ものに皮ものを用く取
一一又梅一ものを梅刃ものを義ぶ

洗月米苞を改染ぬ一一洗くるに苞ゆるのハるぶ
生ぶ又夏乃日拾穀乃原と多く米苞に盛り重ハ不出
六月天梶中脱ものを食し異月のくるのうの保養すへ
又樗葉と保齋をへ一格致餘論よりく古人花夏乃招
富百漢味競し業し於老度也保養食水二臓面煩失土
之服不

月令よりく是月や日出ぶ陰陽年死ぶ美乃前戒ぶ必
掩弓母深山奪亀母或進薦法母敢不節者歌定ん乱又
曰是月やあい居言呪可ん主脚望ぶ外に渡ぶん生蔓
保ん猶よりく是月於井及深穿乃中ものをかれ毒

ちり〻出雞毛と云ふ其中にとり〻みるまろ毛
旋蓮をろもの出ることなかれこれ毒なるべし
此月蓮とて人〻力をのしく用ゆ接すと金匱要略に又
こと〻又蒼耳解鯉魚雞及赤熟せぬ果とくに飲すかれ
鼈と鮑魚と共にしく食べからず又枇杷と鹿肉麩麩也
かるべく食べからず月令廣義に本草方に接齊の陶
蓋書に云へり
と食べるべきまた又金匱要略に云肩髀の傷水と
飲べからず魚鼈乃精血肉也とのめば癥となる
六月農人い田に苗と植へ〻又圃に大蒜乃たねをう
ゆへ〻熱日はいとよくとあるべし

又月の六候第一陸浪生第二賜始雪第三及五芒
六廿五候第三候なり第四麻角解第五除始雪第
六半夏生六月節
廿五候なり
廿五種五十刻二十分夜三十九刻四十分夜五五
六十一刻三十分夜三十八刻三十分 月令廣義

六月

節と小暑と云中と大暑と云○六月の異名 季夏 暑月 皆
俗を林鐘といふ○六月乃和名をみなづきと云ふ
てさとに多氣うれつきさるゆへ
こびなし月といふを略せるとも
朔日 賜冰節とて今日冰を食べるなり物をもつて
仁徳天皇廿六十二年六月に額田大中彦皇子闘鶏中

まことに如ようの出来ひあり山よりこの路中をこやり
結ひしらい廣廣と作りしるやうなる仮屋の人数
一、そして見せるよう廣きりとりて成るみこの乃
ゆうに作りへと結りて同世界ふる氷室なりと
下室なるの氷といいやうにて納むるうと同世
結ふ蓋てかーさくさと一丈ばかりなり。はるのとてとて
多に紫草葺れとあつめ氷をおさむまいいう
やうなる大器おもてけを色と云く熱用と用と
あんなる河室なる山氷を伝法寺・世治ひそれハ
おく氷を載る初めなりを後より書をてこれと
納くに冬氷室と氷室とせられ作りをを記世まて
丹波のおくふる氷室なりなん又富士山伯耆
乃大山なとより氷を敬せーなり民間ハ
蕎麦製せ粽とたくいく云今日食して氷をく
らふる準ーす
りんこうを氷とおさむる事あり周徳と渡人
職と云る氷室とつくるる安の去る山稜を
下深ふ岩谷より氷室とおとく云とおとは夏
に至く暑寒とけんうてあり氷成せーイ殊なる

わかつ物に毛詩に二之日鑿氷沖々三之日納于凌陰
とあり左傳に日在北陸而蔵氷西陸朝覿而出之
とあり是これ氷を賞ずるといふ事なり晉
乃石季龍三伏の日氷井臺の氷をとりて大臣に
賜ふ事鄴中記に見えて上下の説
これ記には及ばず

六日　餘麹を製すこの日なり製法ハ精進にありとつまびらかなれハ

十六日　嘉定とかふるあり鬱林院物語にくはしく
じやうハ嘉祥とかく代明のきときゝ祝和の比ひ
下ハ御代乃さかへを祝ひまゐらする事とかや其起ハ
御所乃みきつくさまつりてはしらいはじめし後の嘉祥ハたるよ
かし六月十六日はじめ一を吉日なりとしはじめてかゝる
かうの八を迎へて其日中に用ひし年号を嘉定とめし改元
て嘉祥ともいひしならはしなりけり嘉祥と称へ
られて其後これと菊綴家の名乾日記
まれの文禄の頃此世話にて云傳ふハ室町家
大樹乃時に六月納涼の折そびれの慰みに楊弓を射
給ひし負たるものの嘉定錢十六文にて買し
て食物を買ひ喰ふかとて興に在りし嘉定の元
宋乃寧宗の年号なり十七年ありて年号を繼

歳は元亨より十六年までの寿なる故十六歳の
ほどなく今日一人こゝのまうてすまの浦に
なれ申候たのもしきかぎりなり
今物とは四季和歌乃後は人はそのかたり事
まことに深く久しかるべき人倫きれることなき
江湖世事根源年中行事をもつて法華
たゞ国史をもつて生涯の事をもつて
はれ所のなり仮のこゝろくちはて世をはなれ
牧　朝の露にたとへ
二月十八日　法華　此日三月十八日　世俗風流の人
家に秘蔵の御一幅と猿をつゝむ功能乃仏のあり天
武天皇乃御願ありしかの大猿と云い紫雲つ
ゝく所に世しるやはるかに
二月十八日　法華　此日三月十八日　世俗風流の人
家に秘蔵の御一幅と猿をつゝむ功能乃仏のあり天
武天皇乃御願ありしかの大猿と云い紫雲つ
ゝく所に世しるやはるかに
乃国民の法記なり　法性寺
御一幅　三月十八日　猿の絵
てをとこ人ぞかとの歌を猿すへ一こと足さり
集に　又　変長寿　八月　猿の絵

とのひろたを見るに長崎と山てらよりたる図
まくそ福寿草のことをあ長寿
いつはこかいはひやといふよ後はたこ月よあるへとこふ
事東船よりたそてり又今日門原にはくあ麻はをまて
人形と紙をあ紙なてて家ととるへてみてかうす
と松の枝といふ
八幡宮御神事はくとの月後彩彩とたりへなてゆ方
ふなこてとをまり波の色よ武中串たてあ今の
葉ものとけんをほたりタ又岩はるまりより後猿
まり賀茂川のみかうとをそてる月ばりてん

こやとなへ人すゝ露むさこれ月をくへしとは河東有り
ゆうり出る月のあかれをそくらい一す志うくと
宵月晦日なりとて無月いへる題し侍り
宅家にて乃旅ように名月いへ明月と云人多
疑之古人も月と法必出門見之神隨度綠
作えを遊及詩歌と與狂例也不限明月見終
諸老元と此歳人紀御會小令人可参詣月様
と此備之件故宵月十三日也　此はよれハ
強よ晴よ胎ゝさらう
九夏三秋とハ作人多くいひならはせり九夏ハ夏の

夏三月九十日あまりハかくせり伏とハ金氣伏藏る日
なり四時のめぐりうつりかはるを相生といひて春ハ木よ
り冬ハ北方よかへる水生木なり夏ハ火にして卯
土用ハ木より火生ずなり冬の水よりして秋の金
ある乃金生水なりたゞ秋の金ハ夏の火よりけ
火克金とて金ハ火に伏せらる夏より庚日アリさりて
つるゝハ伏す庚ハ金なり三伏といふ夏至乃後
第三庚を初伏とし第四庚を中伏とし立秋の後
第一庚を末伏とし凡て三伏と云凡四十日極く
暑す臘乃大寒に對するなり　庚ハ秋よ因てなり

物面を敷くに後書とりよ脇をとへ〳〵新鷹よひとへ表
紙をとりて物すに麻縄よ無くに脇をい表の物す
天氣好日をのりをを一日にて乾たらくし乾う脇
一午未は物む晩よ八暴面の変りたく物
むへ〳〵屋ゞよりへて鷹をさよし一枚ゝ重て明
朝に紙むに書を脇すす一面よ多脇とへう
たに暴面のなりをあり又多れい赤ひ厚ひ
使くへと用ひす書とろこなるすりり物壇
ゆへ物〳〵新とちを脇ひ縫く古故の
く接ゆに紙者を面とゆせて裏へ用へ

屋中に久しを晩さんよりかくれく列に一交脇
たりり裏をりに渡るく老くよし毎年久しくを
ををいをりり書に物壇をし古人を書とゆよををる
しに足りりををを色をの表紙を表面とりよ
をを面へよをりに屋中に用よりく古人書に見
面に多く裏書を用く壇ををく今八七里香こ
也をり 紙表の墨に紙しりこを云をしをよ今私信つちやりの墨こ表
乃ちの紙りハはやりて紙をりかりへ〳〵 又麝香と書麝の中よ入墨ハ義紙
ゆく一ゆを樟脳を風りを又より
図 畫墨漬をの一ゆ評ゆりの脇へ〳〵を墨を漬を書

浄紙ちゝ紙なゝのとゝ墨ゝ繩のようけ筆にかゝるを
なゝしゝ久ゝしく賜まへゝるゝ閑畫のうゝとゝうまゝ表
ときゝすへゝるゝひゝとゝ方ゝ紙とゝあゝひろゝうゝさ
たゝとゝあゝまへゝ物よゝをゝき畫ゝと紙をゝすへゝ是又
ゝめ無をゝれゝ畫をゝすゝ道をゝ紙ゝ藏ゝ紙のゝ義ゝ色のゝあゝ書
ゝゝとゝあゝひ畫閑衣服ゝ衣紙ゝとゝきゝ方ゝゝ畫ゝ筆ゝ八
ゝ物衣色ゝ八ゝすゝゝ藏ゝ墨ゝ墨ゝされゝてゝゝびゝ方ゝ封ゝ書ゝ八ゝ
ゝ甲ゝ胄ゝ墨ゝを布ゝゝもゝめゝん布ゝと墨ゝひゝて書ゝ時ゝ方ゝと墨ゝ日ゝ風
賜ゝまへゝゝ久ゝしゝを賜ゝまへゝゝうゝす百ゝ日ゝ風
ゝて後墨ゝ百ゝ日ゝ風ゝ紙ゝ
衣紙ゝとゝ賜ゝまへゝゝ定ゝ紙ゝを久ゝしゝを平ゝへゝうゝを又黄ゝ紙ゝ紅ゝ色

和ゝの色ゝ行ゝざゝやゝうゝゝの物ゝを日ゝを賜ゝへゝうゝすゝこゝれゝと賜ゝせゝ
文ゝうゝ物ゝ形ゝお墨ゝ書ゝを文ゝ月ゝ衣ゝ乃ゝひゝて色ゝつゝきゝ乃ゝとゝハ
ゝゝれゝのゝけゝをゝひゝゝて洗ゝへゝゝて痕ゝを又ゝ桃ゝ枇ゝのゝさゝねゝを
すゝて細ゝ墨ゝゝて洗ゝへゝハゝを賜ゝ日ゝを久ゝゝう屋ゝ五ゝ風ゝを
ゝゝ物ゝ面ゝをゝひゝゝう衣ゝ服ゝとゝハ物ゝ色ゝと墨ゝゝて洗ゝへゝゝと
あゝう又ゝ居ゝ忠ゝ侯ゝをゝく尼ゝ衣ゝ服ゝ乃ゝ墨ゝを洗ゝうゝとゝハ者
仕ゝ侯ゝと細ゝ墨ゝゝ榎ゝ茶ゝと第ゝを合ゝ世ゝをゝれゝうゝをゝて
ひゝ形ゝうゝ多ゝ温ゝ湯ゝゝて者ゝ物ゝうゝゝてゝをゝくゝ方ゝを洗
洗ゝうゝくゝゝ又ゝ新ゝ天ゝ墨ゝを墨ゝとゝをゝく縫ゝのゝけゝを墨ゝうゝ紙
ゝ墨ゝをゝれゝハゝ自ゝ去ゝ又ゝ白ゝ物ゝとゝすゝう仕ゝて洗ゝてゝをゝう洗ゝ

あられいろの衣服とハ潜石天竺粉各等分を末して
付粉ぬきの酒ハ又絹しぼりて自然又
汚しあるハ坪粉とひ粉ゆうは 獎鬚汁てこれを
のきとれいろよう又塗と用ゆく洗て色すり添
ようけうまつの衣服と洗るハ杏仁川椒等分合之
研爛して洗くるまと搗く浄く洗へハ自然又色
洗くる衣服とハ冷水ゆくへハ義又白衣と洗ふ
て蕊蔔乃煮汁うへハ蕎麦を細末して水て
ゆれて洗へハ白くなるちりいと是も忘れ
新しき黒くる墨痕をも紙に包みくそ石とひく
見ふあてく晒しきざ海苔ゆくく洗て平へ
千金方にいくく墨とさいく見て平こなれ事
うちくなるあまり南風用ひさる墨ハ到日ゆ
新瓦墨に入ふくゆとと研ゆ平にして墨
又研すへし年を経れと新しきうこと九穀乃
墨をめすとへしとそれ世に人薬と毒と貯へよく保
後もこれこそ墨ハ長へ事を志次業を花人を
表ひ病をいたはるれハ書して收あたくハ平癒
八ぬきざるゆうして狂と長つ角一ハ世ちくハ
ムそくなる沈瓶を多くハ絹を墨とへること法ぬく

はとうくすれ〜重へ〜ゆびとれハ久〜くまてるこゝ
うさい是事とたゝ乃良法なり 塊黄白豆 黄後
麦酒門苦 沢蘭 黄芪 甘草 ハ〜ハ〜 脳されハ 鶏
くゝ絶なりゝ 絶ちゝ 出ちゝ くさ 沢るゝ 乳酪
さくなりゝ 少なり
冥加 蛭へ さ ハ 黄くく 脳とへ〜うすたゝ 揚 蒸し
ゝ 絶 書 ゝ よ 脳 ゝ ゝ ゝ れ 金 ハ ゝ 脳 ゝ す 出
原下ハ 塗 に 絶 く 重 へ〜 米 ゝ も 絶 ゝ ゝ く 黄
ゝ ゝ け 重 へ〜 美 冥 中 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
へ〜 絶 ゝ れ ハ 書 ゝ む 冥 乃 絶 ゝ 澤 ゝ ゝ ゝ ゝ

絶中 正 ハ 五 信 ゝ 絶 染 て 黄 澤 ゝ 赤 ゝ ゝ ゝ
米 と 收 ゝ 手 事 被 ハ 世 黄 主 一 の 製 湯 ゝ く く 粒 粉 と
絶 へ 米 郎 と ひ ゝ 粒 ゝ と 絶 く ゝ れ と 收 む ゝ
ゝ と 絶 て も 暗 す 心 石 ハ 門 椒 ゝ 黄 主 と 製 ゝ ゝ 代
汁 ゝ く 杜 椒 重 と ゝ り 米 ゝ ゝ を 澤 ゝ 又 ゝ ゝ ゝ
潛 極 鄭 書 ゝ ゝ 足 ゝ ゝ り 又 巡 乃 汁 黄 椒 の 汁 ゝ ゝ
澤 ゝ ゝ て ゝ り ゝ 重 て も 暗 す 又 秋 乃 百 重 重 ゝ
接 粉 と 入 重 ハ 暗 ゝ 元 米 ゝ と 澤 ゝ ゝ い 製 湯 ゝ ゝ ゝ
び 月 ゝ れ ハ ゝ 製 ゝ て 絶 絶 ゝ ゝ ゝ 米 ゝ 絶 の ゝ ゝ ゝ ゝ
へ い 一 家 絶 て を 絶 す ゝ 農 蚕 接 重 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 生

魚類食すること

月令廣義に曰る七月に入て麺を
うどんのてくこねて湯をとろかしつゝ沸の中に入
煮ハ久しくして指を麺を併とりて食べし也
二月に麥の見そめて新麥を刈て麺
と淡し煮ハ指す

六月に麥したる米とをまぜ味をあく煮て
牡丹のごとく酒を入て
ぶ煮と名づく此の中のもとをとる所の
ひらかなをばりさけ煮へ久しくして

酒をかくよくくさへし
八月に林檎を迎ふ所を成熟と名づく成熟し
不ふ多く冥暗重し
すゝ又炭と冥解へ

業瓜を多冥とく蘇とし
○瓜とこうらゆる法
瓜乃片を九の内八九和
塩を入一夜ほしとうけ
翌日ふかしうへ
又しをかへうへ
後けくし

○瓜と糟漬のとる法　世俗瓜を鹽につけて云瓜と云
みなつかを瓜とれらくらとこそ者なりひてみる氣
乃方にやうなかをうり瓜乃片はれの間に塩分多
をとへ入瓜につくるを入樽に入よくとし紙
をけ二重なるくるをかしをを塩ひけてあるひて塩け
乃かをくなるくるを日よりさくく瓜を糟を多くあるいに
せをくを瓜を入をしてて瓜の口をあらはなやうにしてを
うくを塩を重ねをおとをくしてををを糟をを塩少
ををくをしを大抵糟をををを塩を合ををををくを
糟多く瓜をくをををを瓜多く糟をくををををしを

信の瓜よりすに瓜とはをくしを瓜ゆをとつくるをゆを
をとをいをり瓜のはをり風ひをゆをををををををを
赤をををくををををを樽をををををを瓜へ瓜をを
ををををををををををを樽ををををををををををを
ををををををををををを瓜はををををををををを
ををををををををををを一二枚塩の二ケ月ををを
ををををををををを樽ををををををををを瓜は瓜をを
瓜ををををををををををを

○乾瓜乃製法　如天人瓜とををををををををを
ををををををををを樽ををををををををを

あつまへ入て後元ゆして縄をうけとりて煙に
天窓すしくいたのごとく水にて天に乾ぬ元ゆ
縄にゆらをくるをしくして紙にひたすの法壺をこの人物をあ
ぶ　大氏こゝろ引て後沸湯にこゝろ出い
交豆腐のごとくにして味あえて
○塩瓶乃製法　瓶を大にして塩をつゐて坤と
ゝ紙をもてをはれてうけえあり　引て後一和
こゝへ紙をもて性者のくんさに拓をもて蓋
○乾茶の法　まりこ茶をとれなをとおこえよりう
て中重茶を河原に一夕ひたすくひ出して蓋

ゆかへ一一把ずつ茶を炭の原に
ほかへ一一　ほかへ重い久しくなるとけり
○紅豆醤油の法　米粉を塩にまぜて合こう
ゝ紅豆と共にうるの濃とけ入へ一一搗せす茶
みを又かくれこゝろ
ひ月醤油に一夕紙をもて蓋と製す
○醤油乃製法　大麦　大豆　塩各一石　水二石二斗
黄てへの　先大麦をあつこゝろ粗ゆ蒸をいりて
石臼にこゝろ引て大豆と共にこゝろ黄て大
麦の粉とうるさ　○麹室のひろさ十三畳の人麹と
なす　麹塵の紙をこゝろ河原石二斗乃ゆ一一塩

一右をいれ大釜にてよく煮て其上へ塩湯を大かたにさゝ
しるやうにひたしてをおつらさらかと右の麹に
作りのへまりさめて後二つに能入よくよく拌初より
家内に居らぬやうにし七八日五文日かけに重て一日後
間より入そおわり出して其上かへ入候て後内四十
五日ほど色よく成候時醤を入へし右此饅頭かくは白米壱斗
に水八斗入粥に煮て塩壱斗入よく拌せ冷
右大桶に此麹を入まりまぜて日数三十日程過て酒を
ことごとくかくのまゝ桶のうちより元とも右桶
に入ておき大かたに能は一升ばかりとまぜ入へし初

作りのゝし日より九七十五のわきして何らつもりなり
洗ひまたよく漬菜味噌漬しためて昆布と切て入置ハ
味よくなるなり
〇ひしほの製法　大豆壱斗　大麦壱斗　塩三升　水壱斗五升
麦ハ能く搗てよく煎ておき豆ハ炒て引わり皮
をさりまぜてかひまぜ出しほとけてむして三升入麹にして
たゞし清水と塩とを一つにしてよく煮てさまし麹と作りよく
作りよく混日にあはせ日にかけあま味出るほど同入へし麹の
口を能く合にぬきさらりとよくまぜへしそうしされば
味もよく出る中へ入れ置人々合よしなどといふ

もこへし穀のほどをしらく引く可しとす

○浜名(はまな)納豆(なつとう)の製法 黒豆壱斗 小麦粉六升 先黒豆
しらそ豆れこく煮熟(むし)し小麦の粉をまぶし 室
に入麹(かうじ)になす也 さて水六升に塩二升入て能煮て
桶に入さまし右の麹を入るゝ事て塩けの所に入 又
薑(しやうが) 生姜(しやうが) 山椒(さんせう)皮 陳皮(ちんぴ)たんとをこまかに剋(きざみ)て加へ置
毎日一日に塩汁の内に入まぜてまはし
をく時は蓋ハ塩けらくべくとさまし蓋をして内のくらに
先八十日程して塩をよくしぼり 内なる薑を
出してあみにひろげ日にかわかして壺に入置べし

○又納豆の法 大豆壱斗 大麦壱斗 塩六升 大豆をよく
煮てよく麦をすりひしいで粉にし大豆の煮汁へ
右粉に拌(まぜ)てころをつけ一夜置 次の日むしろ
上にあけて麹にねかし 後塩を入水八升ほど煮
に入て七日程置 陳皮さんしやうの皮しそのは 紫蘇
白胡麻(しろごま) 陳皮(ちんぴ)など入 二日程に押をかけ 薑を刻
入れて又押しを置てくるみを取上べし

○金山寺(きんざんじ)の製法 和州寺にて作る所の名物也 大豆一斗いりて
又西寺にて造る者あり
引わり皮を去麻く細にをきひ入べし 大麦一斗
能いりてよくよく洗ひて一夜浸し 大麦と合せ 麹(こうじ)

乃天をとて下くりて蒸し熟したる時細末の麦粉
を拌世土に埋の入れ世て麹塵の付
へき一日前に蒸かて冷とり切り 蒸き上て冷
合大蒸すに成ると冷乃塩を合せ拌よ入れ世とうけ
一夜置明の上よ蒸すとれ麹をしくし風蒸を
地面にきすます世て拌よ入れとう世切りとうく
うけ置毎日一度ずつ蒸す世十日許立て後簡者
に拌度に稲藁を敷て拌又あの
ごとくふさをして置うけ置毎日蒸す世七十日
過て用へし二三十日よりの味噌に成り

○第年醤の製法 醤と酒と米とうと合せ置て置
醤ゆと日を入れ月土用乃中置ゆ初土重
実日よ脇ー七十日をへてこれを用るその作れ
たる初と酒と水と等分つ入毎度かれいゆをれを
又加る方も醤しゆ又醤乃基を刻てあて
かつを入れいを置と数さとの醤醤をいふ
日和よりの時桶或よ搗搗したる壇壁と仰和をへて又
海地乃宅を畢さる時鉢と浸へ基泥をとさく
泥沙を入へしめ其れ味味をるよへ力

元刀和尚験ものの刀鍛冶と異月ようなるもの
花常の時をもりくぬくしまた月名花の衛
ものをみるくし
京民故実と云法　蕎麦本醫に二十ヶ　雄黄二文目別研　竹上
紙巻して窓にて時花をしるべ
法身ようにてうの骨を焼い敷時花をうめ
骨をすしをべるの門魚の骨い焚えい時敷をもて又
浮萍と蕎麦とを煎てもうしと月令廣義に見え
うの又千金月令にいう月ようの浮萍と為く陰干ス
御茶ようまもくく焚えい敷を絹と走るのうの骨

又日西中の浮萍をとる時花し仮夏氏血をもくこれを
漬し又晒し又漬すかもうの敷度して後まして
寄ようの焼ようの敷をもと居家の敷ようの
麻の茎とけうようけいよく敷をさうるう物をおの感
毒ようのえうの和信ようハ櫨乃末とにくこれをくく敷を
さうるものなりかやしの州ざるをかりの末といさへ
なりえしし古今集毒乃歌ようの
なのやまとハやとに物ようやつと史氏の物をうの
為ものをえようん　猪毒大来敷乃作ス
貴国拝屏奉殿去御彼董婚御狀像

○又蠅多ゝ出いまゝ[illegible]なるを[illegible]ひて[illegible]なかく
迷い[illegible]ると[illegible]和[illegible]慶志の[illegible]又蚤多ゝ出
[illegible]の事と廣の[illegible]ひ移る又[illegible]ふ[illegible]を病
つゝく[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]
[illegible]月の[illegible]人異事[illegible]あて[illegible]或遠[illegible]
病く死する事[illegible]れと中暍[illegible]
これを霍乱と[illegible]
[illegible]ひ
[illegible]
[illegible]
遠[illegible]

脚腹の[illegible]人[illegible]
大蒜とつき燭[illegible]
葉とあ[illegible]
[illegible]月天氣[illegible]
生脚散を服す[illegible]病[illegible]
湯参茋[illegible]湯[illegible]
[illegible]生脚散[illegible]代[illegible]
[illegible]人参 白朮 [illegible]
白扁豆各一[illegible] 五味子 五葉 [illegible] 五葉 [illegible]
加[illegible]一[illegible] 狗[illegible]一[illegible] 甘草 五葉 右十味成

元異類乃時行まと保養して僅に生ることもなれ
寿世保元によりて六月三六日房勝仙翁意旨に又孫六人
のうち夜間浴乳間より伏し異蓋分と意すんくまのこ
せうく風にあたり冷酒を食ふあゝ異地れ寒をはれ酒
暖たる酒と食物して大に飽るなかれ
鄭業記なるものに日よりもむかしと流る人寒光流に收
て冬の寒に流くし原日寒の暑に水をそいい
冷麗に通て新井に桂と用合意義に乃えすり又
老圃乃に嘗に蔬菜さめ用る時みくと流今に流まる
流く こうしと但暖にいたらく清朝にもそく流くし

月令廣義によりて六月に桂楊に水とろく紀土とい第
乃原羊の蓋と甕に穴多し
秋の比鵰風吹ものくいかりしめる物をなし梅雨と
鄙くし第瓦乃樓を焼くもしに樓を物し
比月蕪を食ふ日と貴す羊肉とて人神事と湯の
聖鳥鷹鷲葉菓を食ふと生蒙と食ふ水瘕
となり犬の肉に蠱のれい物毒となり冷食に言
用し冷水生硬果油膩甜食を食するなかれ
尾莫炒燻寒乃原嘔吐宜くめく用し 月令廣義
元文乃百瓜を食するなかれ元うまよく清

ものハ大に毒あり〇庚金廣義なれとも又ゆるくハ
革乃爪八と釵又油餅と地肌しく金へ〇沢物潤れ
咸志ハ爪八白梅と〇ゆるく燥しなる色ハ金しく後
白梅と金〇又麝香をもつく爪と消化す又石膏
色と熱金す〇ハ能爪を消して水となりて空
亡月乃亡候事一潤閏を事二燥燥乃事三
学智 太小暑乃三候 事乃腐芽乃暑少五
土潤濕暑事亡大義 太大暑乃三候 事乃
小暑 暑亡午刻二十分 長三十九刻 巳午刻 大暑 暑五十
八刻二十分 長四十一刻四十分 日金庚義

土用 ものうてハ土昭 又土王をもうけ
事ハ木昭〇ハ火昭〇秋を金昭〇冬を水昭す
五乃八ハ土ハ昭ハ土昭ハ物ハ〇ハ事なり
成ハ完れる信ハ〇ハ乃氣ハ〇〇て四時乃
秋をう辰戌丑未月の事〇ハ寄昭をうる者
十八日一年ハ〇〇七十二日ハ〇ハ七千二百との
〇〇ハ昭ハ木火金水を又ハ七千二百つ〇ハ事
一年とハ〇ハ土ハ〇ハ土ハ〇ハ木と地〇ハ〇ハ土
用ハ春ハ〇〇秋の土用を土衰者して威〇〇冬
乃土用ハ水と木〇ハ〇ハ〇ハ〇〇〇〇〇〇土

用ひ中ごろ金ことに有るゆゑ中ごろ有りし五の
の五月とかくこゝ〳〵に土をまれはべり土をく金を生じ
有るゆゑ秋乃金と土とより生ずるゆゑ春は中央の金の
有あひのゆゑ又一説乃中月なれは中央の土一金を
さそなひ揺くゆゑ月の席となれ乃を春の月金を
季夏は次の中央の土をの月の月
ところしまそのゆゑなれは　和國俗語の百日と
それ程なるゆゑなるべし

俗説に云ふ五月五月の入日蘇及春豆と食ハ疫疫と
疫とて今の人はなくさろ事なり これハ源氏蘇
乃蘇まれ蘇よこてねちれさりやくそ千ろ

俗説に云ふ蘇ありと云れハ中
つゆ蘇ゆゑ蘇ゆゑ蘇ゆゑ
蘇ゆゑ蘇ゆゑ蘇ゆゑ蘇ゆゑ
蘇ゆゑ蘇ゆゑ蘇ゆゑ蘇ゆゑ
人日麻子豆名七枚と羹を疫疫を消すゆゑ
これ蘇の蘇初のまりなひ書しゆゑ
事と他人あやまりてゆゑ
人ゆゑ

六月蘇ゆゑ六月五月乃中ゆ揺くます
六月五月の内ゆ蘇とそうゆ塩と付常ゆ人〳〵　安宮下

血乃久しくやまざるを聞くにかつて驚かず
衰えたる病人は勇者能く嘉肴を弱小の
ものに奪うを驚てよりしかり

因者案時記巻之六畢

早稲田大学図書館
011888001621